



発行日 2002年7月1日

発行人 藤川享胤 編集責任者 浅井宣亮 編集委員 秋 太田 金子 菅原 館盛

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: http://www.soto-zen.net/

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.21



2002年度 SZI 総会集合写真

## CONTENTS

●巻頭 駒大新学長大谷哲夫先生に聞く	駒澤大学学長 大谷哲夫	1
●特集 総会講演会ダイジェスト「慕古の慶快」に学ぶ	瑞応寺専門僧堂 堂長 猶崎通元	2
第4回「ゆめ観音・アジアまつり in 大船」に向けて	SZI事務局 龜野哲也	4
インド仏跡巡礼記	宗教考現学研究所 所長 此経啓助	6
●海外レポート アメリカの仏教書「最近出版された鈴木俊隆老師の本」	ヴァレー 禅堂 堂頭 藤田一照	8
北アメリカ開教師雑感(3)	北アメリカ開教師 (ロサンゼルス禅宗寺) 小島秀明	10
●SZI通信 ホームページURL変更のお知らせ		11
教義、習慣、宗侶の姿勢	SZI事務局 太田賢孝	12
嗣法というカリスマ	SZI事務局 菅原研洲	14
動静報告		15
●寄付者・会費納入者名簿		15

## 巻 頭

## 駒大新学長大谷哲夫先生に聞く



〈編集〉道元禅師ご生誕800年から引き続いて750回大遠忌、駒澤大学学長就任について一言申し上げます。

〈大谷先生〉私は、2000年の道元禅師ご生誕800年慶讃事業の時に座長をさせていただきました。スタンフォード大学で道元禅師シンポジウムを開催したことで、一応完結したんですが、その後、世間一般には、道元禅師が全くといって良いほど知られていない現実を知ることがありました。何とかしなくてはと思い、以前から早稲田大学のオープンカレッジや、その他のところで講義をしていたんですが、後にまとめてお寺で講義をして、それが元で『永平の風』ができました。皆さんの後押しもあって、曲がりなりにも以前よりは道元禅師を現代に少しは浮かび上がらせることが出来たのではないかと思います。自分が生を受けてちょうど六十年。ご生誕800年、そして、750回大遠忌に巡り会った。本当に「勝縁」ですね。それから

今年は駒澤大学が新制大学になって120周年、学林の時代から数えれば実に410年の節目の年です。そのようなときに駒澤大学の新しい学長となり、大変だと思いますが、望んで出来ることでもない。こうした所にも縁を感じます。

〈編集〉今後の海外布教に関して何かお願いします。

〈大谷先生〉たとえば、英語を学ぶのは、早ければ早い方が良いでしょう。そして、日常会話が出来るとでなければなりませんね、それからはお説教です。宗義を頭だけで理解しても信仰には直接結びつきません。信仰心のない人の言葉を誰が信用しますか。それで信者を増やすことは出来ません。曹洞宗は坐禅屋の集団だなどといいますが、坐禅を言葉でどう表現し、信仰の場に持っていけるかが大事です。才能のある人は努力しなければならぬのです。だから、大変なんです。人一倍努力しなくてはダメです。そして、みんなに還元しなくてはならない。これが僧侶の役目ですよ。

(編集：SZI事務局 菅原研洲)

## 「慕古の慶快」に学ぶ

瑞応寺専門僧堂 堂長 榎 崎 通 元



今回のお話をさせていただくのは、もちろん御承知のように、今年が道元禅師様の750回大遠忌ということでございますので、そのつながりのあることとして「慕古の慶快」という題を選ばせていただきました。「慕古」は、御本山の方で、今回の御遠忌の標題になっておるわけでございます。道元禅師様は「慕古」という言葉はたくさん使っておられますが、特に「洗浄」巻にあります「慕古の慶快」を挙げさせていただきました。御承知だと思いますが、一遍これを大きな声で読んでみたら、また味があると思いますので、「しかあればすなわち」から一緒に読まさせていただきます。

しかあればすなわち、<sup>べんどうくふう</sup>辨道功夫の道場、この儀をさきにすべし。あに三宝を礼せざらんや、あに人の礼拝をうけざらんや、あに人を礼せざらんや。仏祖の道場、かならずこの威儀あり。<sup>いゝき</sup>仏祖道場中人、かならずこの威儀具足あり。これ自己の強為にあらず、威儀の云為なり、諸仏の常儀なり、諸祖の家常なり。ただ此界の諸仏のみにあらず、十方の仏儀なり、浄土・穢土の仏儀なり。小聞のともがらおもはくは、諸仏には<sup>しおく</sup>廁屋の威儀あらず、娑婆世界の諸仏の威儀は、浄土の諸仏のごとくにあらず、とおもふ。これは学仏道にあらず。しるべし、浄穢は離人の滴血なり、あるときはあたたかなり、あるときはすさまじ。諸仏に廁屋ありとしるべし。

十誦律第十四云、<sup>らごら</sup>羅睺羅沙弥、宿仏廁。仏覚了、仏以右手摩羅睺羅頂、説是偈言、汝不為貧窮、亦不失富貴、但為求道故、出家忍苦。〈十誦律第十四に云く、羅睺羅沙弥、仏の廁に宿す。仏、覚了りて、仏、右手を以て羅睺羅の頂を摩して、是の偈を

説いて言く、汝、<sup>びんぐう</sup>貧窮の為にあらず、亦た富貴を失せるにあらず、但だ求道の為の故なり、出家は応に苦を忍ぶべし。〉

しかあればすなわち、仏道場に廁屋あり。仏廁屋裏の威儀は洗浄なり、祖祖相伝しきたれり。仏儀のなほのこれる、慕古の慶快なり、あひがたきにあへるなり。いはんや如来かたじけなく<sup>しおくり</sup>廁屋裏にして羅睺羅のために説法します。廁屋は<sup>ぶつそんほうりん</sup>仏転法輪の一会なり。この道場の進止、これ仏祖正伝せり。『正法眼蔵』「洗浄」（春秋社『道元禅師全集』「第二巻」90頁）

これが『眼蔵』「洗浄」巻の終りの方に書かれてあるのです。洗浄というのは今流の言葉で言えば「トイレ」。便所の大小便の仕方について、最初の方は作法から書かれてあります。『般若心経』に出てくる「舍利弗」が、洗浄法をもって外道を降伏した話がありますが、つまりお釈迦様の教えにまだ入らない人の中で、お釈迦様のお弟子達はどのような用便の仕方をするのだろうかと言う人が居った。舍利弗は、その人の見ておる前で用便をした。そのやりかたに感動してお弟子になったというお話をお経の中から出してお述べになっておる。そして、「二七丸」という土をこね団子にして、尻を洗うということが書かれてある。皆様方で『修証義』を読んだりして馴染んでおられる方々であれば、こんな事が出ておると言えばビックリなさると思うんでありますけれども、『眼蔵』の一卷として「洗浄」あるいは「洗面」、ということが事細かに出ておる。こういうところを、私は道元禅師様の教えと受け取っておる、非常に有り難い、それこそ「慕古の慶快」であると、特に思うわけでございます。

この便所の仕方は、曲がりなりにでも現在も道場では行っております。土を使ったりなんかはいたしません。今の時代ですから、トイレットペーパーがありますから、そういうもので、済ましますけれども。小さな桶に水を入れて尻を洗う。お釈迦様の頃から、そういうことが行われておったということが最初の所に書かれてある。それから、我々は身心を調えることによって三宝を礼し、あるいは、人の礼拝を受けることが出来る。その後のところに『十誦律』という律文の中にお釈迦様の実子である羅睺羅尊者がお

釈迦様に御説法をいただいているところが出ております。

僧団に入れられた羅睺羅尊者がいたずらをして追い出され、寝る所がなくてお釈迦様の便所で寝ていた時、お釈迦様が羅睺羅尊者に、「中で寝ておるのは誰だ」「羅睺羅です」「早く出てきなさい」といって便所の外に出して抱えて、羅睺羅尊者の頭を撫でて偈文を唱えられたとあります。「汝、貧窮の為にあらず」お前は貧乏だから、こんな情けない様な格好で便所で寝ておるんじゃないぞ。「亦た富貴を失せるにあらず」富も位も皆かなぐり捨ててこの精舎の中へお前は連れ込まれた、そういう事じゃない。「但だ求道の為の故なり」真実の道を得ることが出来るんだ。「出家は心に苦を忍ぶべし。」これは、お釈迦様の親子の情愛もありましようけれども、真心込めて弟子である羅睺羅尊者に言われた言葉だと思いますね。

これで、羅睺羅尊者が気が付いて、それから後は、他のお弟子達の邪魔にならんように修行して、「密行第一」といわれるようになった。この「密行」は秘密の「密」という字ですけれども「綿密」の「密」。本当に心を込めて修行をするお弟子になられたわけです。こういう事から、道元禅師様が、「しかあればすなはち、仏道場に廁屋あり。」仏様の道場には、必ずお便所がある。禅寺の七堂伽藍で、便所はお風呂と相對してあります。「仏廁屋裏の威儀は洗淨」である。これはきちんとやり方が決まっている。そこで、洗淨、つまり大小便の後の始末をするということは、「祖祖相伝しきたれり。」仏様から達磨様からずっと受け継いで、道元禅師様は750年昔ですが、その後の現在も曲がりなりにでも伝わっている。そこで「仏儀のなほのこれる、慕古の慶快なり」と。私は本当にこれは、ありがたいと思います。仏様の教えが高尚である、非常に幽玄である、色々言われますけれども、現に我々の生活の衣食住の根本につながっている。大小便の仕方までお釈迦様からの教えが伝わっている。こういう事を、私は本当にありがたいことだと思うのです。「慕古の慶快なり、あひがたきにあへるなり。」これは一般のお家でもですね、便所での作法というようなことは、昔から言われたもんであります。便所の中で歌を歌ったり、今頃は便所へ行きますと、本を置いたり、色んなものを並べてやったりする所が段々ありますが。道元禅師様の教えそのものは、やはり、「仏儀のなほのこれる」という仏様の御作法としての便所のやり方、こういう事を強調されるわけでありまして。「羅睺羅のために説法します。」お釈迦様が、本当に心を込めて、便所で羅睺羅尊者に説法なされた。「廁屋は仏転法輪の一会なり。」一期一会という言葉がございしますが、羅睺羅尊者としても、便所でお釈迦様から教えられたことは、尊い御説法であったと思います。「この道場の進止、これ

仏祖正伝せり。」なにも、仏様の前で礼拝するだけではない、便所での作法も、非常にありがたい行持として伝わっておるわけでありまして。

私は、羅睺羅尊者の頭を撫でたというようなことがですね、和尚さん方の「嗣法」、法を師匠から受け継ぐとき、師匠の足下まで七歩、すり寄っていきまして、師匠に自分の袈裟を、左の肩の方へ掛けていただいて頭を撫でるという作法が現在も伝わっている。これは、お釈迦様の教えと、つながりがあると思うんですね。

お釈迦様は、ちょうど2月15日が御涅槃さんでありますけれども、お釈迦様の御涅槃の御姿は日本人の成仏する、亡くなった後の仏として拝む形の根源になっておると思うんですね。最近では病院に参りますと、最期はお医者さんと看護婦さんだけが診ておられて、家族の人たちは外へ出されたままで、良くなるのか悪くなるのかも分からん状態。そうするとお医者さんが出てきて、「終わりました」という。それでも一切が終わり、中へ入って駆けつけたって間に合わん。だから一番最期の別れが上手くいかない、と良く見聞きをする。お釈迦様の最期は、そういう意味では、最も代表的なお手本だと思います。御涅槃の御絵像を拝みますと、本当に我々の最高の成仏の仕方だと感ずるのであります。お釈迦様が御誕生なされて、周遊七歩、「天上天下唯我独尊」と叫ばれて、80年の御生涯を終えられるときには、本当に眠るが如く最期のお姿を私達に見せて下さった。これを2500年後の今日も我々はありがたく拝むことが出来る。本当にこういうことが、お釈迦様の修行力だと思います。いくら上手そうにやっても、今の我々ではとてもその形も出来ませんが、お釈迦様のような良いお手本があるということは、我々仏教徒にとってありがたいことでもあります。「慕古の慶快なり」とご唱導下さってあります。

道元禅師様の750回忌を迎えて、心から報恩の生活をさせていただけるということは何ものにも代え難い、ありがたいこととございます。



## 第4回「ゆめ観音・アジアまつりin大船」に向けて

SZI事務局 亀野哲也



昨年は、米国同時多発テロ、アフガニスタンで繰り返された戦争に象徴されるように、これまで以上に民族・文明の衝突がクローズアップされた年でした。仏教においては「自未得度先度他」の心、釈尊の大慈悲心をもって、ともに生きることを基本としています。私たち仏教者は、平和の素晴らしさ、大切さを世界に向けて大きく提起していく責任があるのではないのでしょうか。

SOTO禅インターナショナルの活動の一環として、去る11月24日、神奈川県鎌倉市の大船観音寺において開催された「ゆめ観音アジアまつりin大船」のまとめと、本年開催に繋げる形でご報告をさせていただきます。

会場となった大船観音の白衣観音像は、もともと観音信仰の普及とともに世界の恒久平和を祈願して建立されました。また、観音像のみもとは原爆の火が燈されています。ここへは普段より篤い観音信仰の方々が幾度となく訪れます。境内に掲げられた絵馬や参拝ノートを見ると、アジア各国の文字が目立ち、日本で暮らすアジアの方々の心のよりどころとなっていることも特徴です。

そこで、観音信仰で結ばれたアジア各国ゆかりの僧侶をお招きし、それぞれの国の様式で平和の祈りをささげ、音楽や舞踊を催し、ひとときでも楽しい時間を過ごしていただく場をつくれないうことで企画されたのが「ゆめ観音アジアまつり」のはじまりでした。「つながる・ひろがる・アジアのねがい」をテーマに、この白衣観音像の前に設けられたステージにおいて、観音様に向かって平和の祈りをささげ、また観音様に抱かれながら民族芸能を奉納します。

昨年開催された第3回「ゆめ観音アジアまつり」は、SZIが企画運営に加わり2回目でありました。参加団体も前回以上に幅広い方面から参加いただきましたが、特

にワールドカップ開催を目前にして、今年も朝鮮民主主義人民共和国ゆかりの団体・大韓民国ゆかりの団体が昨年同様一つのステージで舞踊を行うことができたということは特筆すべきことだと思います。さらに、アフガニスタンを支援するNGOの方々の参加をいただき、現地からの速報や写真展示などを行いました。

SZIスタッフは、当日早朝より集合し、物資の搬送、会場の運営、司会進行、フェアトレードショップの準備などに携わりました。

祭典が始まるとともに、境内には各国の音楽が流れ、賑やかな雰囲気の中参加者は絶え間なく訪れ、入場者・出演者・関係者合わせて2000人を数えました。

会場では、普段あまり交流する機会がないアジア各国のコミュニティ、それを支える団体、そして各国ゆかりの僧侶それぞれがひとつになる場を提供できたことで「ゆめ観音」の目的を概ね達成できたと感じます。

舞台では、平和のメッセージを世界に広げる意味で、出演者・来場者全員で「上をむいてあるこう」「イメージン」などを合唱し、その後でSZIからの平和宣言を行いました。各国の平和祈願法要、民族舞踊の締めくくりとして、プロ和太鼓奏者の村上・高田・井上氏による創作太鼓によりクライマックスを迎え、観客一同惜しめない拍手のなかの閉幕となりました。

事故もなく、盛会裡に終えることが出来たことは、お祭りを作り上げている一人一人の力が結びついた賜物であると感じています。末筆ながら、大本山總持寺監院老師、大船観音寺監寺・松山典生老師をはじめ、大船観音寺の皆さん、宗務庁の瀬野さん、青木さん、そして参加団体の皆様に心より感謝申し上げます。

今年も第4回「ゆめ観音」を11月23日（祭日）を予定しています。今後は、主催・ゆめ観音実行委員会（大船観音寺・SZI・地元各団体により組織）として開催することとなり、鎌倉市の後援も得ました。皆様のご協力、ご参加をお待ちいたしております。



D A T A



平和宣言文

平和を願う心……

それは、全世界どこの国であっても、どのような民族であっても同じであるはずです。

けれども、人間は、その長い歴史の中で、必ずどこかで、戦争と平和を繰り返してきました。

19世紀から20世紀に入ってから私達は機械文明を手に入れ、生活が飛躍的に豊かになりました。一方で人々は、戦いの中で大量に相手を殺す兵器も生み出しました。

ここ、大船観音は、1929年、世界の恒久平和を祈願して建立されました。しかし、悲しいことに、その願いも空しく、日本は第二次世界大戦に突入してしまいました。

アジア各国へ与えた数々の過ちを繰り返してはいけない。敗戦を経て今度こそ、観音菩薩の慈悲によって平和を祈願し、世界から戦争を無くすことを誓い、大船観音は現在の姿に再建されました。

大船の丘にそびえる白衣の観音像は、日本のみならず全世界の平和を、また人々の平安を祈りながら、この地に鎮座なされてから40年たちます。建立に携わった人々の熱い想いは、その後も多くの人々に受け継がれ、観音像のみもとは、「原爆の火」や「戦死者慰霊碑」等、平和への祈りが込められたモニュメントが多く建立されました。

残念なことに、この今の瞬間にも争いは繰り返されています。

ダンマパダ (Dhammapada) の第1章には、次の言葉があります。

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」

つながる・ひろがる・アジアのねがい。お互いを理解し、ともにいきるこころ、平和のメッセージをここ大船の地から世界へ向けて全世界に発信していくではありませんか。

平成13年11月24日 SOTO禅インターナショナル

出演団体一覧 (出演順)

- 大本山總持寺 (平和祈願法要)  
曹洞宗大本山總持寺より監院老師導師による平和祈願法要。
- テラワダ仏教協会 (平和祈願法要) 2名  
アルボムッレ・スマナサーラ長老による平和祈願法要、法話。
- 台湾仏光山寺 (平和祈願・民族紹介) 25名  
平和祈願法要、法話、民族舞踊 ①飛天献舞 ②豊年祭  
在日本朝鮮女性同盟神港支部チャンゴクラブ (民族舞踊)  
5名 伝統芸能、ブンムルの中から、ソルチャンゴを披露。
- チベット僧侶による法要 (平和祈願法要) 2名  
ニチャン・リンポチェ阿闍梨による法要、法話。
- 在日本朝鮮人文芸同盟神奈川支部 (民族舞踊) 8名  
力強いチャンゴの演奏、あてやかな朝鮮舞踊を披露。
- 鎌倉・小袋谷獅子会 (獅子舞) 13名  
五人囃子に、おかめが加わった郷土芸能を披露。
- カンボジア文化会 (民族舞踊) 8名  
ココナッツダンス、米の収穫のあと、満月の日になどを披露。
- アフガン女性と子どもを支援する会 (現地報告) 1名  
アフガニスタンからの現地報告を行います。
- カンチェンニェンダ (民族音楽・舞踊) 5名  
チベット音楽。引続き平和の歌を合唱。
- SOTO禅インターナショナル (平和宣言)
- 久保田正也・久保田幸子 (マントラ古典舞踊) 5名  
平和の祈り、インド古典舞踊。
- プスバ・ラトナ (バリ舞踊) 10名  
レゴン (代表的古典舞踊) その他。
- 風物碑ウリト (農楽) 10名  
日本人・在日韓国・朝鮮人、韓国人留学生、社会人によるユニット。
- 村上功・高田淳・井上智彦 (和太鼓) 3名  
今注目の和太鼓奏者による繊細かつパワーあふれる創作和太鼓。

[出店]

- インド政府観光局 (観光ガイド)
- アショカ (インド料理)  
銀座・インド政府観光局と同じビルにあるインド料理店。カレー各種を提供。
- イーサン食堂 (タイ料理)
- ミクニ食堂 (韓国料理)
- 横浜ベトナム人会 (ラーメン、ゴイクン)
- 朝鮮料理屋台 (軽食コーナー)
- 法務相談  
行政書士芳谷大介氏の無料法務相談のブース。
- 早稲田大学 風街宣伝社 (ちんどん)  
大船の街をちんどんにて巡回。
- ネバリバザロ (民芸品・喫茶)  
ネパールを中心としたアジア諸国関連NPOのフェアトレードショップ。(売上198,652円、内7割は商品開発・経費、3割は支援金へ)
- We 2 1 ジャパンショップ (リサイクルショップ)  
アジアの女性たちの支援をめざすNPOによるリサイクルショップ。当日の収益金は支援金に当てられた。
- SVAハンドクラフト製品販売  
タイの少数民族によるハンドクラフト製品販売。SZIが販売担当した。(売上 73,220円)
- 入場料収入 (344,200円⇒運営経費、朝日新聞歳義援金へ)

詳細は

<http://www.pa.airnet.ne.jp/szi/yume/>

に掲載しています

# インド仏跡巡礼記

宗教考現学研究所 所長 此 経 啓 助



ヴァイシャーリー

## はじめに

今年の1月、インドの八大仏跡を中・高年者のグループ8人を案内してめぐってきました。かつてお釈迦様がさとりを開かれた聖地ブッダ・ガヤーに暮らしていたことがあるというだけの大変薄弱な理由で、大役を引き受けました。

ご承知のように、八大仏跡は約2500年前に実在したゴータマ・ブッダの足跡を顕彰して、後世つくられた聖地です。その聖地に立ったからといって、ブッダの生前の足跡を想像することは、非常に困難です。ただ幸いなことに、ブッダの偉業はインドという異文化の中にあっても、2500年の時空を超えて、まっすぐ私たちの胸に飛び込んできます。たとえば、ブッダの生涯を伝える「八相成道」、つまり兜率天下、託胎、出生、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃にしても、ヒンズー教の神話からきちんと独立して伝承されています。しかし、それはそれで、いまあるヒンズー教の文化から仏教を語ることのむずかしさを、逆に証明しているようなものです。弱ったことです。

## 豊かだったブッダの時代

最近の仏跡巡拝の旅は、入国したデリーから東のパトナ（ビハール州の首都）に飛び、そこからバスで仏跡をめぐるケースが多いようです。私たちの旅もそうで、パトナの北方約50キロにあるヴァイシャーリー（広嚴城）から巡拝をはじめました。

ヴァイシャーリーはブッダが80年の生涯のなかで、い

くたびも往来した重要な聖地です。ガンジス河にも近く、ブッダ在世当時、共和制による自由な空気に満ちたヴァッヅ国の政治・商業の中心地として栄えた、といわれています。ブッダは出家したときも、真理を開いたときも、最後の旅立ちのときも、ここに立ち寄っています。ブッダが大好きだった都市の1つです。

現地には、獅子を頂上にのせたアショーカ王の完全な石柱があり、遺跡公園としてもかなり整備が進んでいます。静かで、平和な空気に満ちています。しかし、そこは現在、豊かな都市ではなく、ひなびた農村地帯です。

ブッダがしばしば立ち寄ったほかの諸都市、マガダ国の首都ラージギール（王舎城）やコーサラ国の首都マヘート（舎衛城）もそうですが、それらの廃墟から当時の都市のようすを想像できません。つい現代インドの猥雑な都市を思い浮かべてしまいがちですが、かつてそこは大勢の商人を居住させた城郭都市だったでしょう。そして、その周囲には緑の農地が広がって、小麦などの農作物を豊かに生産していたと思われます。紀元前7世紀、ガンジス河中流域を中心に一大経済圏が出現していた、とよくいわれますが、その拠点が上の諸都市です。

インド独立後の初代首相ネルーは著書『インドの発見』で、イギリスの植民地にされる前のインドは、農業と大家族主義とカースト制度の3本の柱によって、大変に豊かだった、とのべています。私はブッダの時代も豊かだったと考えています。ブッダは豊かな時代を背景に80年の生涯を送ったのです。しかし、そのことが残された遺跡や現代インド人の生活から想像しにくいのですが、巡拝者にはその点を強調する必要があると思います。

私たちはヴァイシャーリーの遺跡に日没直後に到着しました。昼、強い直射日光に照らし出され、自己主張に忙しかった事物が夕闇に溶け込むと、美しい薄明が荒れた大地をやさしくおおいはじめました。インドの一日で一番魅力的な一瞬です。アショーカ王の石柱とストゥー



霊鷲山

パ（仏塔）の基壇が残るこの場所は、たぶんブッダの時代から城郭の外に位置していて、ブッダと弟子たちがここで一日の疲れを癒したのではないのでしょうか。2500年の時空がすばやく縮む一瞬でもあります。後世、このような城外の静かな場所に、僧院が建てられ、僧たちが修行にはげんだのでしょうか。王舎城外の竹林精舎と舎衛城外の祇園精舎の遺跡もまた、そうした環境に残されています。

## インドにおけるダライ・ラマ

ヴァイシャーリーをあとにした私たちは翌日、王舎城跡、霊鷲山、竹林精舎などのあるラージギールと成道の聖地ブッダ・ガヤーをたずねました。1月下旬、ブッダ・ガヤーでダライ・ラマによるカーラ・チャクラ（時輪タントラ）の灌頂の儀式が予定されていたため、ナーランダ大学跡やサルナートなどの周辺の仏跡をふくめて、それらの聖地は灌頂を受けにきたチベット人で文字通りあふれかえていました。結局、灌頂はダライ・ラマの急病のため中止になりましたが、15万人の人々が集まった、とのちに発表されました。

ラージギールでは大道芸の祭典が同時期に開かれ、家族連れの人々のインドの人々がこれまた殺到していたため、にぎやかな巡拝となりました。ブッダの十大弟子のひとり舍利弗（シャーリープトラ）は、霊鷲山の大会に集まった人々のなかで、つぎのような思いから出家の決心を固めました。

「人々は祭りをむさぼり楽しんでいるが、これは一時のことで、永遠ではない。人々はいま欲望に目がくらんでいるが、やがて死んで灰となって地獄に落ちるだろう。どうして祭りに身をゆだねられようか」

こうして舍利弗は王舎城で名高かった沙門サンジャヤの弟子となって出家しました。もちろん、その後、サンジャヤのもとを去って、ブッダの弟子になります。こんな話を思い出させた祭りのにぎわいでした。

ブッダ・ガヤーは村に入るすべての道に車止めが設けられており、特別な許可なしには車で村に入れません。また、尼連禅河の岸边には、大挙して押し寄せるチベット人のために、宿泊用の大型テントが数十張りも設営されていました。これらはインド政府がダライ・ラマのために用意したものです。ダライ・ラマはインドにおいて非常にあたたかく遇されているようです。法王の動向はひんぱんに新聞で報道されています。旅行中に読んだある英字新聞に、「平和のための教育」の見出しで、法王がインド政府の教育実習機関で行った講演要旨が伝えられていました。こんな言葉がとても印象に残りました。

「クリシュナ、ブッダ、マハヴィーラ、マハトマ・ガンジー、こんなに大勢の偉大な思想家を生んでいる国を

インド以外に知りません。彼らは平和と非暴力を思想の中核にしています。教育について考えるとき、インドの偉大なこの2つの伝統を欠かすことはできません」

## 宗教が生きている

ブッダ・ガヤーの変貌には、すさまじいものがありました。確かにカーラ・チャクラのために、村のあらゆる場所が人々でごった返していました。これは一時のことですが、村中に新しい道路が縦横に走り、そこにできた区画にホテル、寺院、商店、民家が建ち並ぶさまは、もはや恒久的なものです。この変貌はここ5年間のことです。といて、街というにはどこか素朴です。理由は村の経済が世界各地からおとずれる仏教巡礼者によって支えられているからでしょう。

村のシンボルがブッダがさとりを開かれた場所に建つマハーボーディー寺院大塔です。大塔の裏手に金剛宝座と菩提樹があります。私たちは数珠つなぎになってめぐるチベット人の群衆にまじって、押し流されるようにして大塔の周囲を2回巡拝しました。チベットの人々は数珠をくりながら、「オン・マニ・ペメ・フム」（オン、蓮華のなかの宝珠よ、フーン）とくり返し唱えます。私たち日本人はその熱心な姿に完全に圧倒されました。

「宗教が生きている」

グループの誰かがそんなことをいっていました。宗教のもつ熱気につつまれて、私たちは大いに満足しました。



ブッダ・ガヤー

## アメリカの仏教書

## 第2回／禅仏教篇②

## 最近出版された鈴木俊隆老師の本

アメリカ マサチューセッツ州 ヴァレー禅堂 堂長 藤田 一 照



鈴木俊隆老師

前回はアメリカに曹洞禅の種をまく上で大きな功績を残した鈴木俊隆老師の講話録“ZEN MIND BEGINNER'S MIND”という本を紹介しました。

「鈴木大拙」と「鈴木俊隆」の二人はアメリカに禅を広めた大功労者として「二人のスズキ」と呼ばれ、たいへん敬愛されてきました。

かたや鈴木大拙老漢はその精力的な執筆活動によってZEN（主に臨済系の禅）に関する英文の学術書そして一般向けの入門書を多数残しました。

ZENやSATORIという日本語はいまや英語の語彙のなかに定着した感がありますが、それはこの大拙翁の書物の影響力を抜きには考えられないでしょう。

これに対して鈴木俊隆老師は本書の初版が1970年に出されて以来、長い間このたった一冊の薄い書物によって曹洞禅の禅風を西欧において挙揚してきたのです。（鈴木老師は大拙と同じ苗字なのでよく彼と間違われました。そんなとき老師は「わたしはその鈴木じゃありません。あなたが言ってるのはビッグ・スズキで、わたしはリトル・スズキです」と応えたそうです。）

ずいぶん前のことになりましたが、わたしはサンフランシスコ禅センターの僧堂的修行道場であるタサハラ禅センターに短期間滞在したことがありました。

空いた時間にそこの図書館の蔵書をのぞいていましたら、片隅に鈴木老師の提唱を録音からテープおこした原稿の束が保存されているのをみつけました。

手動式のタイプライターで打たれたもので相当な量がありました。

あいにくそのときはじゅうぶんな時間がなくそのすべてに目を通すことはできませんでしたが、あきらかに“ZEN MIND BEGINNER'S MIND”には収められていないもので、わたしにはたいへん興味深い内容でした。

そこのアメリカ人のお坊さんに聞いてみましたら、「その原稿は未整理でまだだいぶ手をいれなくてはならない段階だし、テープおこしされていないものがだいぶ残っている」という話でした。

「このままここで眠らせておくのはなんとももったいない話だ。これが活字になってなんとか陽の目を見るようにならないものか」とつよく思ったことでした。

また、鈴木老師の人となりについては直接に教えを受けた弟子の方たちから折りにふれて貴重なエピソードをいくつか聞かせてもらったことがあります、それはきわめて断片的なものでしかありませんでした。

いったいどういう生い立ちの方なのか、日本でどういう修行をされたのか、どういう経緯で渡米されたのか、どういう経過をたどってこれほどまでアメリカ人に慕われるようになったのか…等々鈴木老師の生涯についての詳しい情報については残念ながら皆目知りようがありませんでした。

“ZEN MIND BEGINNER'S MIND”をくりかえし読めば読むほどこの本には収められていない老師の他の講話があるのならぜひ聞いてみたい、この本に記録されたような話をされた老師自身の人生のことをもっとくわしく知りたいという気持ちがあります強くなっていったのですが、いかんせんどこにも手がかりが見当たらないままだったのです。

ところが、最近になってありがたいことにわたしのそういった願いを見事にかなえてくれるような本が相次いで出版されました。

今回はその三冊の本のことをごく簡単に紹介したいと思います。

まず、鈴木老師の詳細な伝記であるDavid Chadwick著“Crooked Cucumber: The Life and Zen Teaching of Shunryu Suzuki”（『捻じ曲がったキュウリ - 鈴木俊隆の生涯と禅の教え』）（Broadway Books, 1999）。

この本の著者は21才のときから鈴木老師のもとで禅の修行をはじめ5年後には師自身から得度を受けた直弟子にあたる人です。

彼には自分自身の日本での禅修行の体験をユーモアたっぷりに綴った“Thank You and OK!: An American Zen Failure in Japan”（『ありがとう、そしてだいじょうぶです - 日本における或るアメリカ禅の失敗

者』(Penguin, 1994) という著作もあります。

これまで一般にはほとんど知られていなかった鈴木老師の講話や手紙、そして鈴木老師を直接に知る弟子や友人、家族からの多数の聞き書きを交え、日本における幼年時代から説き起こし、アメリカでの遷化にいたる67年の生涯を暖かい筆致で描いています。

厳しい師のもとでの修行時代やアメリカ布教への思い、最初の妻の悲劇的な最期、アメリカ人たちとのさまざまな人間的交流、伝統のないところで禅を教える苦労など老師の赤裸々な姿にはじめて触れたような気がしました。

役に立たない「捻じ曲がったキュウリ」と師からあだ名された出来の悪い僧侶がどのようにして「アメリカ禅の父」となったか、そのドラマを知りたい人には必読の書でしょう。

2冊目は鈴木老師が『参同契』をテキストに用いておこなった提唱の記録である“Branching Streams Flow in the Darkness: Zen Talks on the Sandokai” (『支流が暗闇の中を流れる - 参同契についての禅話』) (University of California Press, 1999)。

本書は1970年にタサハラ禅センターでおこなわれた老師の提唱が録音テープから起こされ編集されたものです。

わたしがむかしタサハラで見た原稿がおそらくその原形になったのでしょう。

わたしはこれまでに何冊か日本語の『参同契』の参考書に目を通しましたが、本書は字句の解説だけではなく二元論的分別を超えた生き方をいかにいまここで実現するかに焦点をあて実践的・具体的に説いている点でそれらのどの本よりも有益でした。

各章末にある質疑応答の部分もたいへん興味深いものでした。

3冊目は鈴木老師に直接教えを受けた人達から老師にまつわるエピソードを集めたDavid Chadwick編 “To Shine One Corner of the World: Moments with Shunryu Suzuki (『世界の一角を照らす-鈴木俊隆とのひととき』) (Broadway Books, 2001)。

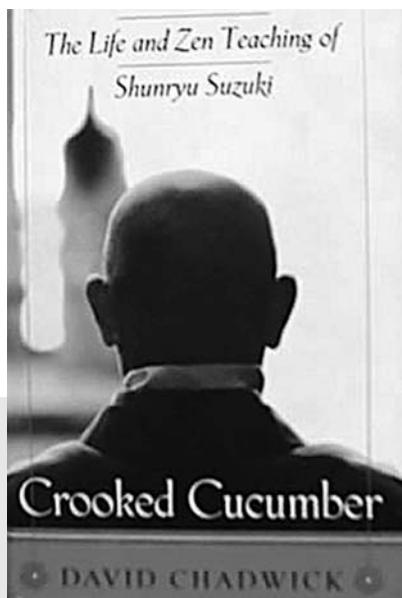
これは60年代後半アメリカ西海岸において日本人の老師とアメリカ人の弟子達のあいだで実際にとりかわされた貴重な禅問答の記録であり「現代の公案物語」と言えるかもしれません。鈴木老師の当意即妙の応答ぶりを彷彿とさせるような話が多数紹介されています。ふたつほどひろってみましょう。

その1: 「わたしが自分の生活がいかにひどいものになってしまったかを説明すると、老師はくすくす笑い出した。わたしもつられて一緒に笑い出しました。しばらくの沈黙のあと『どうしたらいいのでしょうか?』と尋ねた。すると老師は『坐禅をしなさい。坐禅のない生活は時間を合わせないで時計のねじをまくようなものだ。ちゃんと動くけれども正確な時間をつげない。』と言った。」

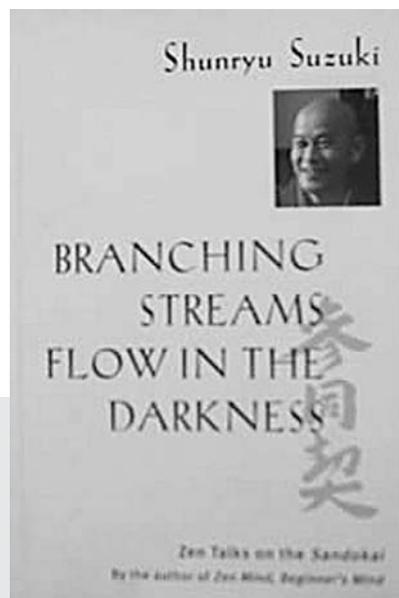
その2: 「精神科医が老師に意識について質問にした。老師いわく『わたしは意識についてはなにも知りません。どうすれば鳥が鳴いているのをほんとうに聞くことができるかを弟子達に教えようとしているだけなんです』

これら三冊の本はまだ邦訳がありません。どなたかこういう本を出してくれそうな出版社を紹介して下さる方はいませんか? 特に鈴木老師の伝記は是非邦訳してみたいと思っているのですが…。

海外開教の偉大なる先人として鈴木俊隆老師の足跡を曹洞宗としてもっと真剣に学びそれを広く一般に顕彰するような努力がなされてもいいのではないかと感じているのはわたし一人でしょうか?



Crooked Cucumber



Branching Streams

## 北アメリカ開教師 雑感 (3)

北アメリカ開教師 (ロサンゼルス禅宗寺) 小島 秀明

常日ごろ私が電話をしたり、書き物をしたり、コーヒーを啜ったりしている寺務所には、私の机の他に少なくとも6人が仕事ができる机とイスがあります。

火曜日になると事務を行うボランティアさんでこれらが埋まります。他にも事務以外の仕事もありますので大勢ボランティアさんが集まって賑やかです。禅宗寺に活気を感じる瞬間です。

私が日本と根本的に違うと感じるのはこのボランティアに対する感覚の違いです。

禅宗寺の沢山の活動もこのボランティアに支えられ可能になります。また、これが、海外のお寺の一番の特色だと私自身は感じています。

現在では日本でもボランティアという言葉が耳にします。確かに日本にもボランティアの意識や概念は存在するのですが、こちらに生活してみて、実生活でのボランティアに対する絶対的意識格差のようなものを感じます。

最初に驚いたのは学校でした。子どもが成長し学校に行き始めます。うちの子は地元の公立学校に通っています。親が学校にボランティアに行くのは当たり前。先生だけでなく親が授業や様々な行事を支えています。熱心な親は毎朝の学校でのボランティアを日課にしています。家内も週に一回、私もお寺が休みのとき（日本では考えられませんが）には学校にボランティアに出掛けます。

ボランティアの仕事も様々で工作の準備から宿題の準備、コピー取りから教室の模様替え、時には補助的に子どもの勉強を見てあげたりもします。毎日、国旗に向かって忠誠を誓ったり、よい子にしているとシールやビスケットなどの賞品がもらえたり、教室の中だけでなく、日本の教育しか受けていない私にとっては、へえ〜っと思うことが山ほどあります。

ものめずらしい事だけではなく、授業の内容、進み具合、先生のとりくみや自分の子どもの情況、クラスの雰囲気、また学校の裏話まで色んな事が分かります。先生も見られています。熱心な先生のクラスはボランティアも増え更に授業も充実します。ある意味、毎日が授業参観といったところでしょう。授業参観に自分の親が来てくれるのが楽しみだったように、子どもたちも親がボランティアに来ると嬉しそうです。

こうして、子どもたちは親がやっている身近なボランティアを通して、ボランティア自体をごく自然に、当たり前のこととして、楽しい思い出と共に心に刻み込んで成長しているようです。

また高学年になるとボランティアも成績評価の中に入ってきます。

時折、ボランティアの時間が足りないのでお寺でやらせて下さい、という高校生に、時間を決めてお寺で奉仕作業をしてもらい、開教師が証明書を書くこともあります。本人も成績のためか一生懸命やってくれます。

社会全体がこの価値観を重要視しています。そういうボランティア立国ですから、個々人の意識が違うのもうなずけます。

なのですが、実は、こちらに来た当初、このボランティアの感覚、というか気持ちが分からず悩まされました。

日本にいたときは、僧侶のみで構成されたお寺や、雇用関係や利害関係で成り立っている仕事や殆どだったので、多くのボランティアの人と一緒にになにかをすることはありませんでした。

ボランティアはその人の善意で行う分、その人の気持ち次第で途中で投げ出すことも自由ですし、ある種の我がままも許される、その責任が伴わない危うさがある。それだけが私の認識でした。

その認識が知らずに問題というか壁を作っていました。信頼しきれない、または、当てにしている裏切られる可能性がある、といった気持ちだったと思います。恥ずかしい話ですが、自分がやればもっと完璧に思った通りに、または確実にできるといった思い上がりもあったと思います。または、こんな大変な仕事、ボランティアさんはやらないだろう、という思い込みもありました。

何年も一緒にやっているとそれが単なる思い上がりであり、思い込みであったと感じるようになりました。



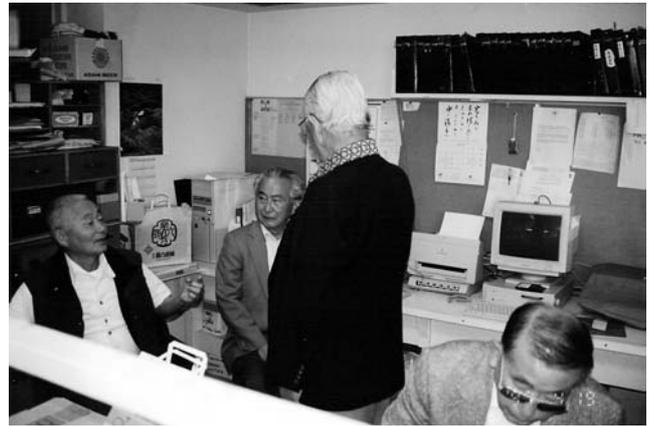
ボランティア

何故、人がボランティアをするのか。その原動力となる人間の「気持ち」を大切に考えれば分かることなのですが、それが分かるのに随分時間がかかってしまいました。

要は気持ち次第。自分が好きな事のためなら時間も労力も惜しみません。好きな人のためなら、自分のできることは何をしてしても苦にならない。応援したくなるようなお寺の活動。集って楽しい場所。自分が役に立つ喜び。そういう単純な事を大切にしているだけで人は多少苦しくても大変でも見返りがなくてもできてしまう。信じきって信頼されきってしまうと、だれしもそれに応えようとしています。

先輩開教師たちがその気持ちを大事にしてきたからこそ今日もこうして多くのボランティアの人たちが集い、禅宗寺の年間570を超える活動を実現させています。沢山の人が集まれば風評や気持ちのこじれも沢山あります。開教師の批判もあります。が、それを具体的に真摯に受け止め改善したり、話し合い、ボランティアさんと僧侶がキャッチボールをしていく中で本来の仏教の教えが生活に溶け込み、お寺でボランティアをする本当の意義が生まれるのでしょうか。

「開教師の本職は、人と人との交通整理」これは先輩開教師がのこしてくれた格言です。故山下総監も現秋葉総監も個々人の長所を伸ばし人を活かしていく、確かに交通整理の達人のようです。この単純な事実は日系、非日系を問いません。海外開教とは、その地で、そこにいる人々と、単純に仏教的生活を実生活の中で具体的に行っていくことにあるようです。



ボランティア

## ホームページURL変更のお知らせ

### 皆様のホームページ運営中!

SZIホームページでは、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。

お陰様で日本も含め世界各国の方々にご覧いただき、

ご好評いただいております。

「さらに親しみやすく、充実した内容をお届けしたい」という思いから、

新しくホームページアドレスを設けました。

今までご覧いただいた方も、これからご覧いただく方も、

さらなるご理解とご協力をお願いいたします。

SZI.BBS（掲示板）へのご意見・ご質問をスタッフ一同お待ち申し上げます。

<http://www.soto-zen.net/>

## 教義、習慣、宗侶の姿勢

SZI事務局 太田 賢孝



## (1) 会報へのご意見から

前回発行の本誌「SOTO禅インターナショナル会報(20号)」は、購読頂いている方からの反響をこれまで以上に頂いた号となりました。

微力ながら編集に携わらせて頂いている者として、大変有り難い励ましとして頂戴致しました。

その中で一件、総会・講演会のお知らせとして記載した日程に関して、六曜(友引)を付記していたことにつき、ご指摘頂いたものがありました。

本来、日取りの吉凶を表す六曜という迷信を、宗侶は廃して然るべきであるのに、SZIがこれを積極的に表記しているということに対しての御異議がありました。

後述の如く、確かにインド以来の仏教、そして宗門のどこに視座を求めても、今日的な六曜のあり方は受容されないものであります。

それは六曜が、正当な因果関係に基づかずに、非合理的に日の吉凶を定めた物であるということと、今日的な六曜が、全く意味の咀嚼を経ずに、迷妄的に人々を惑わしている(“惑わしている”のは、これに惑わされている本人自身そして社会全体ではありますが…)ということに、問題があるからです。

ならば僧侶の努めは、六曜によって惑わされている人々に、正しい信仰に基づいた生き方、迷妄を克服していく姿勢を示さなければならない点、ご指摘の通りであると私は思います。

それにしても、六曜とはそもそもどういうものなのか、そしてどんな経緯があって迷信とされながらも今日のように人々を惑わしているのでしょうか。

拙論は、そんな六曜の成り立ちについてこれを簡単に確認し、そして僭越ながらも些か意見を述べさせていただこうというものであります。

## (2) 六曜について

月日の移り変わりを知ろうとする人間の営みは、洋の

東西を問わず行われてきました。太陽・月・星などの動きを観察し年月日を把握する事は、文明レベルの人間が生きていく上で、必要な所行でありました。

中国でも暦は成立しましたが、様々な教説や思想など、例えば陰陽五行説・易・不空訳『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經』(『大正蔵』巻21・No.1299)などを基として特定の日時に対して善悪吉凶などを意味歴注が発生し、人々の日常生活を窮屈にしていたのです。六曜の起源は中国宋時代の六壬時課と称する時刻の吉凶占いに求められ、これは入学・求師・任官・赴任等の吉凶に関する迷信であるとされています。

毎日を機械的に小吉・空亡・大安・留連・速喜・赤口の日として充当していき、これを参考にして一日の行動を律していくものであります。

六曜は順番通りに毎日に充当されますが、月ごとに仕切り直しされ、今日でも太陰暦の毎朔日には次のように各月によって決められた六曜が充てられています。

正月朔日・七月朔日……先勝  
 二月朔日・八月朔日……友引  
 三月朔日・九月朔日……先負  
 四月朔日・十月朔日……仏滅  
 五月朔日・十一月朔日…大安  
 六月朔日・十二月朔日…赤口

ただし上記の名称と順番は、現行のものであり、日本に六曜が鎌倉時代末に伝来して以来、時代を経てその名称も順番も次のように変化しているのです。

鎌倉・室町期

大安・留連・速喜・赤口・小吉・空亡  
 江戸中期

泰安・流連・則吉・赤口・周吉・虚亡  
 江戸末期

先勝・友引・先負・物滅・大安・赤口  
 現行

先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口

例えば現行の「友引」は、しばしば葬儀の日取りに関係して「友引の葬儀は“友を引く”ので縁起が悪い」という語られ方がされますが、もともとは「留連」「流連」と称されていたものであり、後に発音の近似な「友引」へと変化したものに過ぎません。この時、平安時代以来の陰陽道に「友曳方」という吉凶の方角に関する

説があり、これが六曜の友引と混同されたようです。

因みに「友曳方」ではその日に充てられた十二支によって一つの方角が定められ、その方角に向かって葬儀等を営む事が忌まれたのみで、友引の日の葬儀が忌まれるものとは異なります。

くだんの迷信は、友引の成り立ちを考へることなしに感覚的に捉えられたものであり、世間の曖昧な常識（のようなもの）に無批判に迎合している姿そのものであります。

以上のように、六曜は日々の行動を窮屈に縛り上げ規定するものとしては十分な根拠のないものであって、まして冠婚葬祭の日取りを決める指針としては、頼りないものであると言えます。

百歩譲って、毎朝のように繰り返される星占いや血液型占いなどのような娯楽として受け止めることはできても、規則的に巡っている六曜には、占いほどの楽しみすらありません。

### (3) 生き続ける六曜

このような六曜が冠婚葬祭などでこれほどまでに世間に意識されるようになったのは、明治期以降のようです。

それ以前には多くの暦法・歴注が存在していましたが、信じて益のないものとして古くから批判・否定され続け、明治時代に「妄誕無稽に属し人知の開達を妨ぐ」「日本には日付に就いてもまた吉凶があるとする迷信がある。勿論何の根拠もなく、信ずるに足りない」等の通達類が省庁から出されたことで、大半の歴注はその影を薄めました。

しかし、幕末から明治期にかかる当時は、旧来の価値観や社会の枠組みが内外の圧力によって打ち壊された時期でありました。人々は新たな価値観を模索していく中で、新興の宗教や神秘的な占星などへのブームが起これ、新暦においては不思議な規則性を有するかに見える六曜は、残ったのです。

今日、その非合理さと迷妄性は容易に認識できるものでありながら、私の知りうる限りの宗門内で催される大小様々な行事の日程を組む時には、七曜だけではなく、しばしば六曜、特に「先勝」「友引」が参考とされている様に思われてなりません。

先ほど来取り上げている「友引の葬儀や埋葬は“友を引く”ので縁起が悪い」という迷信のために友引の葬儀は敬遠され、全てではありませんが友引を定休日とする火葬場の多いのが現状です。結果として先勝・友引の通夜・葬儀はなくなり、寺院は先勝・友引を参考に行事の日程を立てるということになります。突発的で「まった」のきかない葬儀と事前に予定していた行事がかち合ってしまうというトラブルを避ける為には、やむなき策であります。

しかしこのような後手の対処が、仏教と六曜の親密な関係として誤解される可能性も排除できないのです。

### (4) 教義と文化に挟まれて

前回の会報に端を発する六曜への取り組みは、実はこれまでに抱いていた自分自身の疑問と性質を同じくするものであります。

今日の日本では、もとは出世間を選択していた僧侶として生きながらも、社会の一員として世間の文化・習慣を無視することはできないというのが、大部分の僧侶が置かれた状況であります。

さらに、その出世間の生き方を示す教義ですら、教義とは乖離していた各地の民俗的な習慣を取り入れていくことによって、インドで発生して以来、中国・朝鮮を経て日本に伝来し、新しいけれども馴染みのある宗教として定着していきました。

本来、宗祖の説かれた教えに触れ、そしてその道で精進努力することこそ、僧侶としての重要な生き方でありましょう。世の中がどんなに変わっても、そして寺院や僧侶の果たす役割が変わっても、僧侶は仏法を生き方の指針・ものさしとして親しみ、これを実践していくことが唯務であることは言うまでもありません。

「門徒もの知らず」という言葉があります。これは浄土真宗や浄土真宗の門徒さんを揶揄した世間からの評です。彼らは例えば人の死を穢れと見ない教えに忠実なため、弔事の帰りに浄塩による清めを行わないそうです。また、友引等の歴注も迷信ゆえに気にしません。このような取り組みが世間から不可解に思われたので「もの知らず」と言われたのかもしれませんが、世間の習慣に迎合せず、阿弥陀仏の本願に対する信仰心一つで生きている姿こそ仏法を貫徹した姿のひとつだと思います。

しかし市井に生き、現代の様々な世相、人々の迷妄に接していく僧侶として生きるのであれば、仏法を振りかざし、世間の習慣を一刀両断に切り捨てることばかりが、正しいとは言えないというのが、私の意見です。

当然ながら、人々を惑わす迷信等があれば廃さなくてはなりません、その成り立ちを知らず、隠された英知を探ることなくして短絡的に「迷信だ」と見做すことは、乱暴すぎます。

結局は、私たち一人一人の僧侶の精進努力によって、教義や世間の習慣をとことん見つめ続け、自分自身の、そして多くの人々の安心を実現する“落とし所”を探り続けていく自省の姿こそ、あやふやな迷信を廃し、確かな信仰を保っていくための姿ではないでしょうか。

最後となりましたが、浅学非才の者が混乱のままに筆を執ってしまった事をお詫びいたします。諸先輩方のご指導、ご叱正を戴ければ、これに勝る喜びはありません。ありがとうございました。



## 嗣法というカリスマ

SZ | 事務局

菅原 研洲

これまでに檀家制度に則った、国内の宗門各御寺院、一部の海外寺院の状態とは異なり、新規信者を獲得しなければ寺院経営が成り立たない海外開教に於いては、社会における習俗としての歴史的根拠や、社会的権限を持っていないために、僧侶各自が、信者に対する優位性の根拠となる何らかのカリスマを具有しなければならない。

このカリスマによって僧侶個人に対する帰依と、帰依に基づく信頼を勝ち得ることで信者に対する支配関係が生まれることになる。言うなれば各自が「ミニ教祖」になるとできようか。

カリスマとは非日常的な天与の資質であり、類型はいくつか提示できるが、簡単に言ってしまうと、僧侶個人と面と向かう時に、信者が得る事ができる「この方は何かが違う」という感覚が重要になってくる。

カリスマに関して最大のものは生まれつき具えている天賦の才能であり、どのような社会・組織にいても上に立つ人も立たれる人も疑問を抱かれない人が居る。

ただ、そうした先天的なものだけでなく、現代に於いても僧侶個人が後天的に得ることができる。今回に限って言えば僧堂での修行経験を通して得るような内面的・外面的な非日常的資質である。無闇な自信は自己陶醉でしかないが、自信に対して批判を繰り返す、或いは繰り返され昇華された自己の経験に対する確信は、布教において強力な効果を持ち得るだろう。或いは、これこそが内面的な非日常的資質の根本である。

外面的な資質であるが、例えば『宝慶記』には、如浄禪師から道元禪師が「你是後生なりと雖も、頗る古貌あり」と言われたことを自ら記しておられる。ここには、若い道元禪師が、古老のような相貌をしていた、一種の外面的に顕れた非日常的資質を示しているが、先天的才能であることも考えられる。釈尊の三十二相もそうしたものであるが、そうではなく、端的に外面的な資質とは、僧体としての御袈裟であったり、浄髪であったりするけれども、それらを超えて信者が得られる非日常である。

これらの内面性・外面性が相俟って僧侶個人のカリスマが形成され、力動的な信者化導を発すであろう。就中、内面性・外面性の統一について最大の根拠となる嗣法に関しては、宗門における思想的位置付け

の特異性からも考慮される必要がある。

宗門嗣法では『御嗣書』が必ず授受されることで、具体的に嗣法を表信する物証を僧侶個人が持つことになる。実際に、現在御本山では丁寧に表具された伝・道元禪師将来の『御嗣書』自体が信仰の対象になっている。さらに嗣法を行う際の伝法儀規は歴史的背景と思想的表詮を持つ体系を具えている。それにより、嗣法はカリスマの継承という意味を持つことができる。そこで教線が空間的な横の広がりを持つだけでなく、時間的な縦のつながりをも約することになる。

この点が特に、海外に於いて現在の日本にいる我々が思っている以上に「力」を持っているようである。

私が聞いたことがある問題は、御本山で「在家得度」を行うと、ときの貫首猊下から絡子を頂戴するのだが、それをもって貫首猊下の弟子であると主張した海外の方が実際に海外で弟子を獲得することがあったらしい。このように、嗣法の無しに化導が行われている事に関しては大いに問題であろう。

道元禪師の御著作を拝読しても、仏祖そのもののアイデンティティーを端的に示すことは難しい。示せないのではない。おそらくであるが、仏祖の本質を説明したというよりは、仏祖としての現象を記述した様にも見える『正法眼蔵』等で、あまりに多様に示されており、仏祖そのものに対する分析と、自己解釈が分裂していく。したがって、それを羅列したとしても、もはや単一的な事象としての仏祖への復元ができないのである。

あるいは、仏祖が「一法一儀の参学」そのものを指すのであれば、単一的な事象に還元されないのは自明である。つまり、而今の生命としての具体的身心から離れることがない、極めて能動的に構成された世界に於ける行の一端が仏祖であり、それを客観的に並べて羅列することは、あまり意味がない。或いは、道元禪師はそうした視点を持たないことに価値があると考えておられたのかもしれない。

それはさておき、嗣法とは、これからもより強力に衆生化導するための根拠となっていくだろう。仏祖のアイデンティティーを規定するものとして、受戒・出家とともに客観的事実性を持っているために、忽せにできない根拠となるからである。嗣法とは客観的事実と主観的事実とを架橋するのである。その架橋はより一層の伝法儀規の完遂、そして、それ自体の意義を自己反省することによって、自ずから具るカリスマとなる。こうした根拠を土台にして、化導はより一層力動的に溢れたものになるのだろう。

寄付者・会費納入者名簿

◆ S Z I 特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。

(敬称略・順不同)

2001年12月1日～2002年4月30日まで

山本現雄	亀岡市
西高寺	多摩市
市川智彬	横浜市 興禅寺
福島伸悦	行田市 興徳寺
杉原真爾	愛知学院大学学監
此常啓助	SKK・ブッディカ
関東管区教化センター	
西沢応人	豊島区 祥雲寺
瀧澤和夫	新宿区 東長寺
細川正善	耶麻郡 天徳寺
藤川享胤	鶴岡市 般若寺
檀上尚道	宗務庁教化部長
大本山永平寺大遠忌局	
修広寺	川崎市
加藤孝正	富士市 永明寺
佐藤昭次郎	新宿区
大場満洋	大宮市
オーシャントラベル	
飯島尚之	中野区 宗清寺

佐藤博道	高岡市	明禅寺
(株)しゃじ	秋田市	
菅原研洲	世田谷区	
関岡俊二	多摩市	高西寺
瀧澤和夫	新宿区	東長寺
館盛道明	大和市	定方寺
多羅尾道春	埴科郡	耕雲寺
長福寺	久慈市	
続道雄	台東区	玉宗寺
つばた書店	福井市	
出川成海	横浜市	
永井成典	知多郡	宝珠寺
中小路冨道	舞鶴市	祥雲寺
中野東禅	鶴見区	
細川正善	耶麻郡	天徳寺
前田泰明	台東区	出山寺
松永然道	清水市	宗徳院
柳周峰	川崎市	全竜寺
山田茂雄	横浜市	
山本現雄	亀岡市	正誓寺
横山敏明	横浜市	西有寺
龍潭寺	名古屋市	
慶松寺	東村山郡	
石川順之	京都市	詩仙堂丈山寺
土田由美子	品川区	
藤木隆宣	世田谷区	
横山信吉	横浜市	
梅田良光	鎌倉市	龍宝寺
小野田秀貴	鶴岡市	竜蔵寺

◆ S Z I 会費納入者

新規会員並びに会員ご継続ありがとうございました。

(敬称略・順不同)

2001年12月1日～2002年4月30日まで

青木哲夫	文京区	妙清寺
青山嶺雲	静岡市	山王寺
浅井宣亮	大府市	地藏寺
市川智彬	横浜市	興禅寺
伊藤治雄	名古屋市	万松寺
茨木兆輝	佐世保市	西蓮寺
岩井恵澄	黒部市	東信庵
内山浩遙	練馬区	大増寺
大橋幸雄	北埼玉郡	医王寺
大藪芙美子	中野区	天徳院内
押田清道	名古屋市	
垣内善勝	葛飾区	萬福寺
金木文雄	横浜市	
黒柳祖道	長野市	天周院
源憲雄	羽生市	富徳寺
建明寺	利根郡	
小池彭道	下伊那郡	関昌寺
笹川悦導	新宿区	観音庵内
佐藤昭次郎	新宿区	

S Z I 動静報告

2001年12月1日から2002年4月30日まで

2001年12月5日	会報20号編集会議発送作務
2002年1月20日	役員会 新宿区 東長寺
1月23日	会報20号発送作務 中野区 宗清寺
1月25日	総会準備打合せ 曹洞宗檀信徒会館
2月13日	総会 曹洞宗檀信徒会館
4月15日	大本山總持寺監院老師へ拝問 大本山總持寺
4月26日	役員会 大船観音寺
	ゆめ観音打合せ

\* 会報編集会議・事務局会は常時インターネットにて行っております。

## 梅花法具募集のお知らせ

### ブラジルに梅花の心を!!

今、ブラジルでは梅花法具が不足しています。  
あなたの梅花法具をブラジルの仲間へ譲ってください。



連絡先 曹洞宗宗務庁 伝道部詠道課  
TEL.03-3454-5416



曹洞宗宗務庁では、海外布教の一環として、毎年、梅花流特派師範をハワイとブラジルに派遣しています。

ブラジルにおける曹洞宗は50年ほど前に高階禅師の巡錫によって開教され、梅花流詠讃歌は35年ほど前に当時の開教師によって伝えられたといわれています。しかし、その後指導者不在の状況が続いていました。1995年、ローランジャ仏心寺創立40周年記念祭の折りに、当時南米総監であった森山師より「ブラジルの講員が指導者を待っている」との要請を受け、西山弘子詠範が指導のため派遣されました。

以後、1997年より毎年特派講習会の巡回が行われており、2002年6月現在、第6回荻野泰道師範が巡回中です。前回までの巡回師範は、第1回平川俊道師範、第2回阿部真澄師範、第3回伊東允伸師範、第4回上田秀人師範、第5回小野田秀貴師範です。

2001年4月16～27日に開催された第5回特派講習会参加者は、両大本山別院仏心寺32名、ローランジャ仏心寺34名、ポンペイア日本人会館18人、禅源寺32名、総監部主催指導者講習会14名であり、参加者の多くは、70～90歳の年輩者です。30年以上の間、指導者なしで梅花の法灯を絶やさずにこられた講員さん達の苦勞に報

い、ブラジル梅花の存続のためにも後継者の育成を図っていくことは急務でしょう。

新規講員を獲得できない要因は、常住の指導者がいない、ブラジルで育った人達にはリズムが合わない等いろいろな要因が考えられますが、日本との物価の違いが大きな要因の一つであることは明白です。最低賃金が15000円ほどのブラジルでは日本の法具は非常に高価なものとなります。講習会の各会場に数名は若い方もおりましたが、法具を持っておらず、また寺院にも予備の法具がないため、手持ちぶさたになってしまいます。

婦人会組織があるだけに、寺院で法具を常備していれば、協力を得て講員の増加を図ることは期待できると思われます。反面、このまま放置すれば近い将来消滅するとは想像に難くないでしょう。

このことは、梅花講に限ったことではなく、ブラジル曹洞宗の存続にも関係した問題だと思われます。是非、各寺院において、講員さんに「眠っている法具を、ブラジルの仲間へ送って下さい」と協力を呼びかけて下さい。現在、宗務庁伝道部詠道課では使わなくなった梅花法具を“ブラジルへ送るため”募集しています。詳しくは、詠道課にお問い合わせ下さい。（文責 浅井宣亮）

